

問題一 次の文章を読んで、後の問い（問一～問五）に答えよ。

「〇〇とは何か」という問いに答えようとするとき、私たちはしばしば辞書を引く。しかし、少なくとも筆者はそうだが、読者の皆さんも、辞書の定義を読んで「そうか、なるほど」と腑に落ちたことは多くないのではないか。ある概念についてよく理解したいのなら、ずっとよい方法がある。それは、調べたい言葉がどういった言葉と結びついているのか、あるいは結びつきやすいのかを考えてみることである。

たとえば「愛」という言葉あるいは概念は非常に曖昧であり、定義だけを聞かされてもよく理解できた気にはならないだろう。しかし愛という言葉が性（セクシュアリテイ）、男女、恋、結婚といった概念と強く結びついていることはわかるはずだ。もう少し緩いつながりまで許せば、友情、ケア、尊敬、献身、自己犠牲といった言葉と結びつく。ネガティブな言葉とも結びつくことがあるだろう。忍耐、拒絶、傷心、嫉妬、裏切り、脅迫（取りつかれ）などである。

実は、言葉の意味というのは、さまざまな言葉との関係においてのみ存在する。それぞれの言葉に独立した意味内容が最初からあるわけではない。結婚、愛、家族、そして親子という言葉の意味も、他の言葉とのつながりにおいて理解されている。さらに、このつながりのうちどれが（a）キョウウチョウされるかは、時代や社会、個人、そしてもちろん場合によっても違う。

読者の皆さんにも、この言葉と言葉のつながりを「活性化」させてほしい。具体的には結婚という言葉がどういう言葉と結びつきやすいのか、かつてはどうだったのかを考えてほしい。

前近代の人々にとっての結婚は、しばしば愛の概念とのつながりが弱く、私たちの時代の結婚の概念からは理解しにくいものだろう。「わかりにくい」というのは、「つながりがみえにくい」ということだ。前近代においては、結婚は愛というよりは別の事柄、たとえば親族関係や「家」とのつながりで理解されてきた。そう言われてみれば、私たちはいくらかこういったつながりについて知っているはずだ。見合いを通じて親が決めた相手と結婚した祖父母から聞かされた話や、映画やドラマ（時代劇）などを通じて想像できる部分はあるだろう。こういったイメージを活性化させてほしい。

ア、前近代では子の出生はしばしば生産力の拡大（組織成員の増加）として認識される一方で、子の数が多すぎれば組織の（b）ソングクに危機をもたらすとも考えられていた。したがって家の責任者である家長には、結婚に関する権限のみならず、子の数の調整をする権限を与えられる場合もあった。このことは現代人からすれば遠い世界の出来事なのかもしれないが、会社のアナロジーで考えると理解しやすい。家長（社長）である男性は常々、家（会社）の行く末について思案をめぐらした。どの他の家（取引相手）からどういう女性を迎え入れ、また自分たちの子（たいていは娘）をどういう家に送り込むのか。自分たちの組織の生産規模（田畑の大きさ）からして、どのくらいの子ども（人員）を増やせるのか。うまく子（後継者）は育つのか。

こういったアナロジーでは「わかったつもりになっただけで、正しい理解ではないのではないか」と心配になるかもしれないが、最初はそれでいいのである。前近代の結婚については、歴史家でさえわかっていないことがたくさんある。「女性を家に送り込む」と書いたが、「家」がどの時代にどの程度ちゃんと成立していたのかについても、はっきりとわかっていないことが多い。家族の歴史を研究する歴史家は、（c）ダンペン的な資料を、私たちが結婚について抱いている概念とつなげることで可能な限り整合的に解釈している。歴史家や他の社会の専門家の知識には十分に敬意を払う必要があるが、入門レベルならばまずは気軽に構えることも必要だ。

もうひとつ、概念（言葉と言葉のつながり方）における緩さ・強さには違いがあるが、いずれにしても確固としたものではない。結婚についても、時代を通じて常に強く結びついてきた概念は存在しない。結婚は、さまざまな要素とのつながりを理解するには、こちらも最初からあまり固定的な枠組みを持たない方がいい。

イ さっそく、結婚の概念についての探求をはじめよう。結婚はどういった概念と結びつくだろうか。

少し広めに拾ってみよう。恋愛（性愛）、祝福、式典、性別、家族、同居、出産、親子、家計、系譜、相続、不貞、離別、法（父権や嫡出）といった数多くの概念と強く関係してきた。あるいは今でも関係している。ほかにもいろいろあるだろうが、出発点としては十分だろう。

次に考えるべきことは、結婚と結びつきたいいくつかの概念のうち、結びつきが強かったのは何か、それが時代、地域、そして同じ時代と社会でも結婚という言葉が使われる個々の場面によってどう異なっているのかについてである。

現代の欧米文化では、結婚は愛と強く結びついている。したがって「愛のない結婚」はしばしば否定される。それに対して東アジア、特に韓国や中国では、結婚は「お金」、つまり（特定の男性の）経済力や結婚後の生活の経済的安定性とも結びつく度合いが強い。もちろん愛も意味を持つが、結婚となるとそれ以外の要素の比重も大きい。日本では中国や韓国ほど結婚とお金の結びつきは強くなく、愛もそれなりに重視されるだろうが、それでも結婚相手の選択、特に女性が男性を選ぶ基準として、やはり経済的安定性が重要だと感じる人は多いだろう。

（1）これと関連して、キリスト教社会では結婚は（神による）祝福の概念と強く結びついている。教会からの祝福のない結婚は結婚ではないと考える人がいまだに多い。教会からの強い抵抗がありながら同性婚がキリスト教世界で最初に導入されたのも、結婚に対するこのような象徴的意味から同性カップルが排除されていることに対する問題意識が強かったからだと考えられる。

「結婚は愛と経済のどちらにより強く関係しているのか」ということは、以上のように研究者が国際比較的な観点から論じる点でもあるが、一般の人々の争点にもなりうるものだ。「結婚においては家計の安定性が大事だ」「いや、愛があればいいのことは乗り越えられるはずだ」といった、よくある議論である。さきほどの国際比較も全体的な（d）ケイコウの話であり、同じ社会でも個人の置かれた状況などによってあるべき結婚の意味は多様であることは言うまでもない。カップル関係において愛が重視されるフランスのような社会でも、お金の問題がついて回することは多々ある。なぜなら結婚は同居、すなわち共同生活とも強く結びついているからだ。

結婚は、「（「お金」と「愛」のような）対立的な位置にある複数の概念と結びつくし、この結びつきはしばしば人々の価値観の対立としても現れる。つまり人々は、結婚と何が結びつくのかを「前提」として振る舞うこともあるし、何が結びつくのか、何と結びつくべきなのかについて他者と対立することもあるわけだ。

（2）このように多様な概念と関わりあっている結婚であるが、それでも人類の長い歴史において、たいてい生殖と、集団の営み（経営）という概念と強く関連していた。父子関係は、この両者と関連する。つまり、生殖が父子関係を重視する組織の論理のなかで生じる場合に、結婚は重い意味を持たされる。

ウ

、結婚は友人関係のように単なる思いやりや信頼に基づいた関係ではなく、多かれ

少なかれ子を持つことを想定した男女関係（生殖関係）であった。こういった関係は性的関係と同じではないことに注意しよう。たとえば同性愛関係は性愛関係のひとつだが、生殖にはつながらない。そのため、以前は結婚と同性愛とはまったく別の概念であり、それらは結びつきがなかった。結婚から同性愛が排除されていたというより、結婚と生殖の結びつきが強い以上、結婚と同性愛を結びつけるという発想自体が生じなかったのだ。

エ、結婚は人々の共同生活、さらにはそれを取り囲む組織と深く結びついてきた。共同生活とは、複数人が生計・住居を共有しつつ、一定の利害関係を共にすることである。前近代社会では独居は例外的であり、たとえ奉公といった身分で独身のあいだに親元から離れる場合でも、奉公先の家に住み込み、共同生活を送ることがほとんどであった。

前近代の共同生活は時代や社会に応じて多様なかたちをとるが、少なくともひとつの結婚からなる関係——すなわち夫婦——を含むことが（**e**）アットウ的に多かった。そしてこのことは現代社会でも同じである。

オ、こちらは無視できない例外がある。ナヤールなどの母系社会では、結婚（のような関係）がないわけではないが、それは妻問婚に基づくもので、持続的な共同生活ではなかった。つまり、ふだん共に暮らす集団のなかには夫婦という単位が含まれておらず、妻は夫とそれぞれが生まれた生活拠点に居続ける。つまり、ある程度安定した男女の生殖関係はあったが、それは共同生活の単位にはなっていなかったのだ。

ただこれは例外的であり、極めて多くの社会では、結婚は共同生活の核となる関係であった。前近代社会では血縁のつながりが強かったという考えがなされることがあるが、実際にはほとんどの家族的集団の核となったのは——ナヤールのような母系社会を除けば——非血縁関係である結婚であった。

（筒井淳也『人はなぜ結婚するのか』より）

問一 傍線部（**a**）～（**e**）を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の（①）～（④）の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際（**a**）～（**e**）は、それぞれ解答番号1～5に対応するものとする。〔解答番号1～5〕

（ a ）	キョウチヨウ	（①）	町長	（②）	思潮	（③）	調和	（④）	特徴
（ b ）	ソングク	（①）	依存	（②）	尊重	（③）	損害	（④）	町村
（ c ）	ダンペン	（①）	編集	（②）	変化	（③）	等辺	（④）	片隅
（ d ）	ケイコウ	（①）	傾斜	（②）	形態	（③）	系統	（④）	経過
（ e ）	アットウ	（①）	倒立	（②）	当選	（③）	灯台	（④）	平等

問二 **ア** ～ **オ** に入るものとしてもっとも適切なものを、次の（①）～（⑤）の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際 **ア** ～ **オ** は、それぞれ解答番号6～10に対応するものとする。〔解答番号6～10〕

- （①）まず （②）次に （③）また （④）なお （⑤）では

問三 傍線部(1)「これ」が指す内容に関する説明として適切なものには(1)を、適切でないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号11～14に対応するものとする。〔解答番号11～14〕

- (i) 日本では愛もそれなりに重視されるものの、結婚相手の選択、特に女性の男性を選ぶ基準に経済的安定性が重要だと感じられている。
- (ii) 現代の欧米文化では「愛のない結婚」がしばしば否定されるのは、結婚と愛が強く結びつけられているからである。
- (iii) 韓国や中国では、経済力や結婚後の生活の安定性と強く結びつき、愛は意味をもたない。
- (iv) キリスト教社会では結婚は祝福の概念と強く結びついており、教会からの祝福がない結婚は結婚ではないと考える人もいる。

問四 傍線部(2)「このように」が指す内容として適切なものには(1)を、適切でないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号15～18に対応するものとする。〔解答番号15～18〕

- (i) 人々は、結婚と何が結びつくのかを「前提」として振る舞ったり、何が結びつくのか、何と結びつくべきなのかについて他者と対立したりすることもある。
- (ii) カップル関係においてフランスでは愛が重視されるために、お金の問題はそれほど重視されない。
- (iii) 人類の長い歴史において、たいてい生殖と集団の営みという概念とは強く関連づいてきた。
- (iv) 結婚は同居、すなわち共同生活とも強く結びついている。

問五 次の(1)～(4)の文を読み、本文の内容と一致しているものを一つ選べ。〔解答番号19〕

- (1) 前近代の人々にとつての結婚は、私たちの時代の結婚の概念からは理解しにくいですが、「つながりがみえにくい」だけで、実は同じものである。
- (2) ナヤールなどの母系社会は妻間婚が行われ、持続的な共同生活も結婚関係もない例外といえる。
- (3) 生殖関係につながらない同性愛は結婚とはまったく別の概念とみなされ、結婚と同性愛を結びつける発想自体が生じなかった。
- (4) 「愛」という言葉あるいは概念は非常に曖昧であり、説明を聞かされても理解しづらく、定義できない。

問題二 次の文章を読んで、後の問い（問一～問五）に答えよ。

『徒然草』は、鎌倉末期に兼好法師によって書かれた作品である。筆者が「つれづれなるままに」、心に思い浮かぶことを書き綴ったというから、現代という随筆に近い。

ア、これを書いた兼好を、皆さんはどのような人物だとイメージするであろうか。教科書などで目にする兼好は、草庵の縁側付近に机を置いて、書物を読んだり、ものを書いたりというような図柄が多い。そのようなイメージともあいまって、俗世間と交わりを断ち、ひとり黙々と執筆活動を続ける隠者の姿が、まずは思い浮かぶのではないだろうか。

イ、これもよく教科書に採られて有名な『徒然草』第七段には、冒頭に次のような印象的な文章が置かれている。

あだし野の露、消ゆる時なく、鳥部山の煙、立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかに物のあはれもなからん。世は定めなきこそ、いみじけれ。

「あだし野」「鳥部山」は、それぞれ京都にあった墓地と火葬場の地名。そのような場所の露や煙が消えずに残っているというのは、人が永遠に生きながらえるということの喩え。もしそのようなことがあるとすれば、人生には何の情趣も生まれまいであろう、と兼好は言う。世は無常。何が起こるか分からない。人間の（a）ジュミヨウも定めがない。しかし、だからこそ生きる愉しみが生まれる、というのだ。

このような章段からは、兼好は「世の無常を悟り、人生を達観している人」というイメージが生まれるだろう。学校教育では昔も今も、中世文学の本質は「無常観」であると教えることが定番であるため、『徒然草』も何やら悟りすました、真面目な随筆だというイメージをもっている人も少なくない。

ウ 『徒然草』にはそういう、ある意味、真面目な側面もある。しかし（1）学校で教えられる『徒然草』は、この古典のほんの一面にすぎない。（b）イガイに思われるかもしれないが、『徒然草』には恋愛の秘訣を扱った章段も多くあり、たとえば近世期（江戸時代）には、「兼好〓恋愛の達人」という認識も広まっていた。『徒然草』第三段は、

万にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうざうしく、玉の卮の当なき心地ぞすべき。

という文章が始まる。諸芸に秀でているとしても、恋愛の情趣を好まない男は、玉でできた盃の底がないようなものだ――すなわち、外見だけは立派であるが、一番（c）カンジンなところがぬけていると言っているのだ。近世期の人びとは、いわゆる好色物の小説を書くときなどに、好んで兼好のこの言葉を引用している。あの兼好も、恋愛が大事と説いているではないか、と。

『徒然草』にはこの他にも、滑稽な話、巷間の噂話、日常生活の豆知識、王朝物語の習作めいたものなど、じつにさまざまな内容が書かれている。それらのなかには時に、前後で言っていることが矛盾していたり、少し極論すぎるのではないかと思われたりするものもある。

だから近世期以来、『徒然草』には賛否両論が常に渦巻いていた。たとえば、仏道に励んでいたはずの兼好が「色」だの「恋」だのを論じるのはけしからんとか、人は長くとも四十歳くらいで死ぬのが見苦しくないなどと言いながら（第七段）、自分は六十過ぎまでのうのうと生きてい

るのはおかしいといった、急所をついたなかなか手厳しい批判もある。

エ、近世から明治までのあいだ一般的に信じられていた、南朝の忠臣としての兼好像もある。兼好は吉野に展開した南朝方に心を寄せる人であり、京都において北朝方をスパイ活動していたという説である。これは『徒然草』そのものというよりは、伊賀地方で伝承されていた口碑が成文化され、いつしか史実として（d）ルフしたものであるが、現代から考えれば荒唐無稽に思われるようなこの説が、近世から明治の徒然草注釈書などでは、ごく大真面目に論じられていたのである。

オ（2）近世までは、『徒然草』は多様な角度から読まれ、論じられてきた。そしてその評価の（e）シンブクの大きさも、この作品の大きな魅力であつたと言える。それなのに現代では、先述のように「世の無常を悟り、人生を達観している人」というような兼好像・『徒然草』観に、ほぼ一元化されてしまっているように思われる。これはまことに残念なことだと言わねばならない。

優れた古典というものは、その本文自体の価値だけではなく、それが何世代にもわたって読み継がれてきたという、歴史的価値をも有している。古典と現代の作品との違いは、まさしくこの歴史的価値の有無である。古典として生き残った作品は、時代や社会の変化にさらされつつも、何度も再評価を繰り返されてきたのである。

現代から直接、その作品を評価することは、もちろんあつてよい。だが、その評価が本当に確かなものなのかどうかを判断するためには、先人、それも現代からは少し隔たった時代に生き、現代人とは異なるものの見方、考え方をもった人たちの残したそれと比較するのが、ひとつの有効な手段である。

そこで本書では、主に近代以前の先人たちが、『徒然草』のどのような章段を、どのように評価してきたかという歴史を振り返りつつ、それらを手掛かりとして、『徒然草』の本質や魅力に迫っていききたい。

昔に比べて研究が進んでいる（ように見える）現代の「読み」も、じつは絶対ではない。それは、おそらくこれからも続くであろう徒然草解釈の歴史の、ほんの一角にすぎない。現代の文学的枠組みで解釈しようとするため、忘れてしまった重要な読み方——じつは『徒然草』の本質を射抜くような——もあるかもしれず、その場合、古い解釈が復活するということも十分ありうるのである。

本書では、現代ではあまり知られていない章段とともに、よく知られた章段でも、じつはこんな読みが可能だったのかというものを、なるべく取り上げるつもりである。これによって、『徒然草』の魅力がより深まることを期待したい。

（川平敏文『徒然草 無常観を超えた魅力』より）

問一 傍線部（a）～（e）を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の①～④の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際（a）～（e）は、それぞれ解答番号20～24に対応するものとする。〔解答番号20～24〕

(a) シュミヨウ	(1) 本命	(2) 受験	(3) 妙齡	(4) 重要
(b) イガイ	(1) 概算	(2) 翻意	(3) 異常	(4) 偉人
(c) カンジン	(1) 完成	(2) 簡潔	(3) 肝臟	(4) 感謝
(d) ルフ	(1) 不満	(2) 付属	(3) 留守	(4) 清流
(e) シンブク	(1) 不振	(2) 不審	(3) 神明	(4) 幸福

問二 ア オ に入るものとしてもっとも適切なものを、次の(1)～(5)

の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際 ア オ は、それぞれ解答番号 25～29 に対応するものとする。〔解答番号 25～29〕

- (1) では (2) また (3) たしかに
 (4) さらに言えば (5) このように

問三 傍線部(1)「学校で教えられる『徒然草』」に関する説明として適切なものには(1)を、適切でないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号 30～33 に対応するものとする。〔解答番号 30～33〕

- (i) 人生にはなんの情趣も生まれないという思想に基づく作品。
 (ii) 「無常観」を本質とする中世文学のひとつ。
 (iii) 「兼好＝恋愛の達人」という捉え方。
 (iv) 悟りすました、真面目な随筆。

問四 傍線部(2)「近世までは、『徒然草』は多様な角度から読まれ、論じられてきた」とあるが、具体的にはどのように読まれ、論じられてきたのか。本文に挙げられている例として適切なものには(1)を、適切でないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号 34～37 に対応するものとする。〔解答番号 34～37〕

- (i) 滑稽な話、巷間の噂話、日常生活の豆知識、王朝物語の習作めいたものなど、『徒然草』にはさまざまな内容が書かれており、その多様性が賞賛された。
 (ii) 兼好が吉野に展開した南朝の忠臣であり、京都において北朝方のスパイ活動をしていたという説が一般に信じられており、『徒然草』の注釈書でも真剣に論じられた。
 (iii) 『徒然草』は中世文学の本質である「無常観」をテーマにしたものとして注目され、兼好もまた「世の無常を悟り、人生を達観している人」とみなされた。
 (iv) 『徒然草』では「人は長くとも四十歳くらいで死ぬのが見苦しくない」と述べているのに、兼好自身は六十過ぎまで生きていたのは矛盾している」などのなかなか手強い批判もあった。

問五 次の(1)～(4)の文を読み、本文の内容と一致するものを一つ選べ。〔解答番号 38〕

- ① 現代の文学的枠組みで『徒然草』を解釈しようとするあまり、以前にあった本質を射抜くような解釈が忘れ去られてしまっている。
- ② 近世期の人びとは、いわゆる好色物の小説を書くときなどに、好んで『徒然草』の「恋愛の情趣」を大切にすることを説いた一文を引用している。
- ③ 教科書などで目にする兼好は、草庵の縁側付近に机を置いて、書物を読んでいた、ものを書いていたりというような図柄が多いが、これは誤りである。
- ④ 優れた古典は歴史的価値を持っている。それゆえ現代から直接、その作品を評価するには、先人たちの残した評価との比較を行わなければならない。

【問題は以上で終わりです。】